大学院のゼミの談話における配慮表現と前置き表現ストラテジーについて

S01（カナ・漢字表記）

１．はじめに

この論文の目的は、大学院のゼミの談話における配慮表現について、質問者の前置き表現ストラテジーの比較によって明らかにすることである。日本語学習者は初対面または親しくない人に質問をする際、適切な前置き表現ストラテジーの使用によって、会話の一つの難関を乗り越えられる。つまり、配慮表現の効果はコミュニケーションをスムーズにすることであるため、この分析の結果は日本語を勉強している留学生などにとって会話力の上達を支援する可能性がある。研究の資料の分析でどんな前置き表現をいつ使えばコミュニケーションをスムーズにできるかをこの論文で研究しようとする。

２．先行研究と本研究の位置づけ

配慮表現、特に前置き表現について扱った研究には野田（2014）、陳（2007）や大塚（1999）などがある。まず、野田尚史は主に配慮表現はなぜ使われる、配慮表現の現れ方、種類、機能やとらえ方について述べる。野田氏によると配慮表現は「悪いけど」のような前おき表現や、携帯メールで使われる笑顔を表す絵文字のように、「相手に悪く思われないようにするための手段」である。また、配慮表現は、依頼や謝罪など、「相手への働きかけ」が強い場合に現れやすいとする。つまり、大学院のゼミの談話の質問者が発表者に質問をする、つまり依頼する場合では配慮表現を使うのはふさわしいと思われる。配慮表現は、発話の初めに使う前置き表現だけではなく、発話の終わりに使う「文末のモダリティ表現」や、「ほしいんですけど」のような「間接的な表現」などの形式がある。また、断定を緩和したり（断定緩和）、相手に共感していることを表明したり（共感表明）、相手に対して申し訳ないと思っていることを伝えたり（負担表明）や相手に理由を説明すること（理由説明）などの機能を持つ。野田氏によると、配慮表現を研究するとき、互いの人間関係を含めた場面や状況でどのようなな言語形式が使われるのかを分析するという方法が大切である。本稿では、この分析方法を基本とし、配慮表現を研究する。

陳臻渝はまず、配慮表現を対人配慮型と伝達性配慮型に分け、対人配慮型を人間関係を重視する表現に定義し、伝達性配慮を情報を効率よく伝えるための表現と定義する。陳氏はさらに次のように配慮表現を下位分類する。人配慮型の種類は聞き手に詫びることによって対人関係に対する配慮を示す「詫び表明」、聞き手の気持ちを受け入れて、聞き手の立場に立って同意や共感を表明することによって対人的配慮を表す「理解表明」、話し手が自分自身のことを謙遜することによって対人的配慮を示す「謙遜表明」と話し手が自分の言動について解釈を行うことを通して対人的配慮が表される「釈明提示」がある。伝達性配慮型には伝達話題を予め明確に

提示することによって、伝達性への配慮を表す話題提示と話し手がどのような様態で発話するかを提示して伝達性への配慮を果たす様態提示がある。

大塚容子はテレビ討論における前置き表現を「ポライトネス」の観点から分析した。大塚氏は「積極的配慮」によるストラテジーと「消極的配慮」によるストラテジーを比較し、積極的配慮によるストラテジーは合意点を捜す、否定を避ける、共通点を主張することや楽観的な態度をとることだと述べ、消極的配慮によるストラテジーは間接的な表現を使う、疑問文や生け垣表現を使う、聞き手に対する負担を最小限にすることだと述べる。大塚氏は前置き表現は疑問文や生け垣表現と同じ機能を持つため、消極的配慮に当たると述べる。

しかし、大学院のゼミの談話を対象に、質問者の前置き表現ストラテジーの比較という観点から扱った研究はない。そこで、私は質問者の前置き表現ストラテジーの比較で分析を行うことにしたい。

３．研究の資料と分析の方法

研究の資料は、2015 年 9 月に、神奈川県の三浦半島のホテルで行われた都内の大学院の某ゼミナールの 40 分程度の談話二つの文字化したものである。一つは、絵本による多読を経験した成人学習者（日本語学習者・韓国語学習者）へのインタビュー調査の研究について発表した後、発表者と発表を聞いていた大学院生の質疑応答の談話の文字化である。この談話に参加した人物は発表者Ａ、質問者Ａ１、質問者Ａ３、と先生Ａである。もう一つの資料は、日本語学習者のレポートを書く力を詳しく理解するための因子分析について発表した後、発表者と発表を聞いていた学院生の質疑応答の談話の文字化である。この談話に参加した人物は発表者Ｂ、質問者Ｂ１、質問者Ｂ２、質問者Ｂ３と質問者Ｂ４である。そして、この二つの資料の文字化データから配慮表現の観点からデータを抽出し、質問者の前置き表現ストラテジーの比較によって分析を行う。

４．分析の結果

以下の表は二つの資料の文字化データから談話の参加者が使っている配慮表現の特徴を抽出し、統計したものである。配慮・関連表現の特徴とは配慮・関連表現えお構成する、頻繁に使われる言葉と定義する。

	特徴	数	比率
配慮・関連表現	～ですけど	２２	４７％
	ちょっと～	13	２８％
	～ですが	３	6%
	～ですけれども	３	6%
	特にない	２	4%
	～ますが	２	4%
	ですので～	１	2%
合計		４７	100%

配慮・関連表現の特徴として一番多く使われていたのは ４７%を占めた「～ですけど」である。次は「ちょっと～」であり、２８％を占めている。この二つの特徴は合わせて７５％を占めてあり、データの中の配慮・関連表現のほとんどに現れていることが分かる。

５．考察

まずは、質問者Ａ３の配慮表現を分析する。

質問者Ａ３：話がもっと簡単な方に戻っちゃうかもしれないん**ですけれども。**

この配慮表現は「～ですけれども」である。この発言はこの後、質問者Ｂが聞く質問の内容について解釈を行っているため、この前置き表現は陳氏が定義する釈明提示にあたる。質問者Ｂが聞く質問は「インタビュー、学習者としてのインタビューは、韓国語を学習している方にも」である。質問者Ｂは自分が聞く質問の内容が前の内容と違うため、発表者Ａにとって分かり難い可能性があると考え、発表者に不快な思いをさせることをできるだけ避けるように、自分の行動についての解釈を行う。このように質問者Ｂは発表者Ａとの人間関係を維持しようとする。

次は質問者Ａ１の発言を分析を分析する。

質問者Ａ１：あの、えーっと、私も割と、なんていうか一頭の固い、日本語教師になりつつある、感じで(笑い)

この配慮表現は分析の結果のなかの特徴が「特にない」表現に当たる。特徴がないのは内容が複雑であるため、この内容を発表者に詳しく説明する必要があり、この説明に質問者が集中しているだと思われる。つまり質問者Ａは自分を「頭が固い日本語教師」と表すことによって自分の性格を軽く批判し、自分の地位を低くする。つまり、話し手が自分自身のことを謙遜することによって対人的配慮を示しているため、質問者Ａは陳氏が定義する謙遜表明という前置き表現の類を使用している。質問者Ａの質問の内容は次の通りである。

質問者Ａ１：あの、絵本はあまり向かないっていう（発表者Ａ:はいはい）。で、日本語教育においても、たとえば、ま、特に、成人の学習者には、絵本だとまずたとえば学習者が抵抗を示すかもしれない、こう（発表者Ａ：はいはい）、子どもっぽいとかいうのもありますし、語彙の面でも、あの、あ、そうですね、その、まず、伺いたかったのはその、絵本の（発表者Ａ：はい）定義というか（発表者Ａ：はい）、ここでいう絵本はどんなものかっていうのを先に伺わ、いたかったんですけども

この質問は成人学習者に絵本を読ませるのは適切であるかを疑問にしているため、発表者のフェイスを侵害する可能性がある。つまり、質問者Ａが謙遜表明の前置き表現を使用した理由はこの可能性を配慮したためだと思われる。また、発表者Ａが

この質問を聞いて、質問者Ｂが成人学習者を絵本を読ませることは適切ではないことを断定していると思ってしまう可能性があるため、この前置き表現は野田氏が指す断定緩和の機能を目的として使われていると思われる。

発表者Ａ：ちょっと言ってることが変わるんですけど、

この配慮表現の特徴は談話の中で一番頻繁に使われていた「ちょっと」と「～ですけど」である。この配慮表現の内容、つまり「言ってることが変わる」から見れば、発表者Ａにとってこの配慮表現を使う目的は発表者がこの発言のあと、話しを違う方向に向けることを質問者や先生に知らせるためだと思われる。つまり、これは以上の質問者Ａ３の例に似ている。しかし、質問者Ａ３の例といくつか異なる点がある。まずは、この表現は質問者Ａ３の例より砕けた言い方を使っている。質問者Ａ３は「～ですけれども」を使ったが、発表者Ａは「～ですけど」を使った。両方の場合は丁寧語を使っているが、「けど」は「けれども」を短くした、砕けた言葉であるため、「けれども」の方が丁寧に聞こえる。また、二番目に頻繁に使われていた「ちょっと」を使っているため、この表現はより砕けたように聞こえる。

発表者Ｂ：次のページに行きますが、

この例文は以上の発表者Ａの発言に似ているが、いくつか重要な違いがある。一つの違いは「言ってること」と「ページ」が変わることである。「言ってること」は複雑な内容であるため、「ちょっと」とですけどを使って、話をあいまいにしていると思われる。一方、「ページ」が変わることは明確で形を持っているため、「～ますが」を使っている。

先生Ａ：ですので、ここで、あの、ご意見を伺いたいのは、あの、

この例で使われる「ですので」は二つの資料の中で一回しか現れないが、興味深い特徴である。このケースでは、この「ですので」は先生Ａが初めて発言する言葉である。この発言の前は質問者Ａ１と発表者Ａとの間の談話である。つまり、先生Ａは自らこの「ですので」を使って質問者Ａと発表者Ａの間の話を終わらせ、自分の意見や質問を話し始める。

これらの特徴の使い方を見て、日本語学習者が使える、適切な前置き表現ストラテジーを提案する。この前置き表現ストラテジー目的はコミュニケーションをスムーズにすることであり、日本語を勉強している留学生がゼミの談話に参加するとき使用できるものとする。

一つの点は丁寧語を使うか砕けた言い方を使うかによって発表者と質問者の間を調整することである。

６．まとめ

参考文献

大塚容子（1999）「テレビ討論における前置き表現」『岐阜聖徳学園大学紀要』教育学部外国語学部、37 号、ｐｐ．117－131

陳臻渝（2007）「日本語会話における前置き表現」『言語文化学研究. 言語情報編』大阪府立大学、2 号、ｐｐ.99－115

野田尚史（2014）「配慮表現の多様性をとらえる意義と方法」野田尚史・高山善行・小林隆編『日本語の配慮表現の多様性―歴史的変化と地理的・社会的変異―』くろしお出版、ｐｐ．3‐20